

聖書: 第一列王記15章25～34節

説教: 罪の道を歩んだ

はじめに

イスラエルはソロモンが亡くなった後、北王国イスラエルと南王国ユダに分裂し、それぞれが王さまを立てて独自の道を歩んでいきます。今回は南王国の二人の王について見ていったのですが、どの王も信仰者としては不完全で主の目になかないことをしていくところを見ました。

今日は南王国から目を転じて、北王国の二人の王、ナダブとバアシャを見てまいります。長くはない箇所ですが、ここには人が人を殺す血なまぐさい話だけしか書かれておらず、できればこんな所は飛ばしてしまいたいと思いたくなります。ここに恵みがあるとは到底思えないからです。でも聖書は、どんな箇所であろうとも私たちの救いを目的として書かれていると私は信じています。このところにも恵みがあるはずで、恵みはいったいどこに隠れているのか。ともに考えてまいります。

## 1 北王国イスラエルの王

### 1) ヤロブアムとその子ナダブ

25、26節。「ユダの王アサの第二年に、ヤロブアムの子ナダブがイスラエルの王となり、二年間イスラエルの王であった。彼は主の目に悪であることを行い、彼の父の道に歩み、父がイスラエルに犯させた罪の道を歩んだ。」

ナダブの父ヤロブアムは、もともとソロモンの有能な部下として働いていた人ですが、あるとき預言者アヒヤから「見よ。わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える」（一列王11:31）と言われます。

この預言は、ソロモンが死んだのをきっかけにして結成された反ソロモン陣営の長老たちにヤロブアムが招かれて北王国の王座に就いたとき成就します。

そこまではよいとして問題はその先にあります。なぜ、神は北王国の王座をヤロブアムに与えると言われたのか。きちんとした理由があるのです。アヒヤはヤロブアムに11章33節ではっきり語っていた。

「というのは、人々がわたしを捨て、シドン人の女神アシュタロテや、モアブの神ケモシュや、アンモン人の神ミルコムを拝み、父ダビデのように、わたし目になうことを行わず、わたしの掟と定めを守らず、わたしの道に歩まなかったからである。」

ソロモンの時代、人々は異教の神を拝み、主の目になうことを行わず、主の道に歩まなかった、だからヤロブアムに十部族として北王国を与えるとされたのですから、そうしますとヤロブアムに期待されていたことは、なんですか。異教の神が身を捨て、できるのならばダビデのように主の目になうことを行うよう心がける。それがヤロブアムのすべきことだった。ところが彼はまったく逆のことをしてしまう。権力を握ったとき結局彼は、二つの金の子牛を造り、これが私たちを救った神であると宣言して拝ませ、勝手に祭壇を築き、主を捨ててしまうわけです。

### 2) バアシャ

ヤロブアムが死んで、その子ナダブが王の座を継いだときも、父ヤロブアムと同じことを繰り返します。そして、それからわずか二年後、部下であったバアシャに裏切られ殺されてしまいます。そのときの様子が29節にあります。「彼は王となったとき、ヤロブアムの全家を討ち、ヤロブアムに属する息ある者を一人も残さず、根絶やしにした。主がそのしもべ、シロ人アヒヤを通して言われたことばのとおりであった。」

「シロ人アヒヤを通して言われたことば」とはなにか。話は、ヤロブアムの子どもが病気になったときにさかのぼります。そのことで、ヤロブアムの妻がアヒヤの所を尋ねたことがありました。そのときアヒヤはこのように預言したのです。「あなたは、これまでのだれよりも悪いことをした。（中略）だから、見よ、わたしはヤロブアムの家にわざわいをもたらす。」（14:9, 10）このことばのとおりになったわけです。

## 2 なぜ一家全員根絶やしにされるのか

### 1) 疑問

さて皆さんはここを読んで納得されるでしょうか。ヤロブアムもナダブも主を裏切ったのですからこのふたりがその罰を受けるのは理解できる。でも、一家全員が根絶やしにされるのはどうでしょう。あまりにもひどい話ではないのか。なぜ家族まで巻き添えにならなければならないのか。家族は関係ないはずだ。平気でこんなことをする旧約の神は残酷で嫌いだという人もいるかもしれない。いったい神は何をを考えておられるのでしょうか。

## 2) ヤロブアムの罪

もちろん神が残酷な方であるはずはありません。なにか理由があります。そこでまず、ヤロブアムの犯した罪が何であったのか、そこからもう一度確認していきましょう。30節。「これはヤロブアムが犯した罪のゆえ、またイスラエルに犯させた罪のゆえであり、彼が引き起こしたイスラエルの神、主の怒りによるものであった。」

ここに二つのことが書かれています。一つ目は、ヤロブアム個人が犯した罪のゆえ。二つ目は、ヤロブアムがイスラエルにおかさせた罪のゆえである。同じフレーズが26節と34節にも繰り返されていますからよほど大切なことのようにです。一人の人が間違っただけの罪を犯したとすれば、その罪のことを神が問いかけてくる、それは理解できます。でもヤロブアムの場合はそれだけではない。もう一つある。彼は王としての地位と権力を利用して、二つの金の子牛を造り、勝手に祭壇を築き、勝手に祭司を雇い、勝手に祭りの日を定めて、これを人々に守るようにさせたところにもう一つの大きな問題があった。王の命令は絶大です。ここでは、王の地位を利用して人々を誤った方向に導いたことを問題にしているようです。

王も一人の人間なのだから時には間違っただけのもするはず。それも許されないのかと、同情するのでしょうか。しかしイスラエルの王には一つの責任が最初から課せられたことを思い起こさなければなりません。

## 3) 王の責任

サムエル記や列王記の時代、イスラエルの周りの国々は王をいただくのがすでに一般的となっていたなかで、イスラエルだけは王を立てず、神が直接国を治めるスタイルを取っていました。ところが、収穫の時期になると国境線を破って敵が襲って来て何もかも奪っていく問題が出て来て、とうとう困り果てた長老たちは、敵と戦う王を与えて欲しいと祭司サムエルに願ったことが、イスラエルに王が立てられる最初のきっかけとなりました。つまり、イスラエルの王というのは本来神ご自身であったわけですが、そこへ人間の王が代理人のようにして立てられていくわけですから、王は神に代わって民たちを導くこと信仰者であることが求められる。そのような絶対条件がついていた。イスラエルの王の中でこの条件をクリアしたのはダビデであったわけで、それでことあるごとに、「父

ダビデのようには」というようにして比較されているわけです。

ヤロブアムもその子ナダブも、そしてナダブを裏切ったバアシャも、このような王としての責任を全く果たそうとせず、かえってほかの神々を拝むように国民に強制したわけですから、だれよりも責任を問われていく。その罪は、一家全員が根絶やしにされるほどの重大さである。聖書はそのように語っています。

## 4) 悔い改める機会

それでも神は厳しいと思うのでしょうか。でも、神は何度もヤロブアムに警告していたことを忘れてはなりません。あるときは預言者アヒヤを通し、あるときはユダからわざわざ神の人を送って祭壇の前で語らせたこともありました。それを聞いていたヤロブアムが神の人に向かって「彼を捕らえよ」と叫んで伸ばした手がしなびたとき、彼はどうしたか。「どうか、あなたの神、主にお願ひして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手は元に戻るでしょう。」(13:6)

それで神の人がヤロブアムのために祈ったら手が元どおりになる。そのような奇蹟を目で見ていた。でもなお悔い改めなかった。神は厳しい方であると言う前に、こうまでして変わろうとしないヤロブアムの頑なさを見るべきでしょう。

## 3 王として来られた方

最初に、今日の箇所はどこに恵みがあるのだろうか、そのことを問いかけました。最後にそのことを考えます。

いま見たとおりにイスラエルの王に課せられた条件は誠に重いものがありました。たったひとりダビデだけが主の目になつた王と呼ばれたわけですが、そのダビデも「ヒッタイト人ウリヤのこのほかは」という条件付きだったことを思うと、完全なイスラエルの王はいるのだろうかと思いたくなります。ひとりだけおられました。もうおわかりのとおり主イエス・キリストです。主イエスが十字架につけられたとき、十字架の上に「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」という罪状書きが掲げられたことを思い出します。イエスはいったい何者であるのか、皮肉なことにこの罪状書きがはっきりと示しています。この方は、ユダヤ人の王、イスラエルの王として私たちのところへ来られた。

その真の王であるイエスはなぜ十字架で処罰されなければならなかったのか。この方は、イスラエルの王に課せられた条件に違反したのですか。

いいえ、この方は完全な信仰者でしたから主の目にかなったイスラエルの王でした。処罰されるような罪はひとつもありませんでした。ではなぜ処罰されるのか。不思議な言い方をします。ヤロブアムはイスラエルに罪を犯させ、その責任を問われました。主イエスはそれと同じように、ご自分の民が犯した罪であるのにもかかわらず、これは王としての自分の罪であるとして引き受けられたからです。不思議に思いますか。でも旧約の時代から、神はイスラエルの王にそのような責任を問いかけていたのです。そのためにヤロブアムの一家の息ある者が一人も残さず、根絶やしにされなければならなかった。そのことを見ると、私たちが犯した罪がどれほどひどいものであったのか、知ることになります。私たちが受けるべき罰を、王として来られた主がご自分の責任として引き受けてくださったことを覚えて感謝いたします。